文語詩稿　五十篇

宮沢賢治

目次

砲兵観測隊

〔盆地に白く霧よどみ〕
〔たそがれ思量惑くして〕

悍馬〔一〕

〔そのときに酒代つくると〕
〔月の鉛の雲さびに〕
〔こらはみな手を引き交へて〕
〔翔けりゆく冬のフエノール〕

退職技手

〔月のほのほをかたむけて〕
〔萌黄いろなるその頸を〕

〔氷柱かゞやく窓のべに〕

来賓

五輪峠

流氷（ザエ）

〔夜をま青き藺むしろに〕

〔あかつき眠るみどりごを〕

〔きみにならびて野にたてば〕

初七日

〔林の中の柴小屋に〕

〔水霜繁く霧たちて〕

〔あな雪か　屠者のひとりは〕

著者

〔ほのあかり秋のあぎとは〕

〔毘沙門の堂は古びて〕

雪の宿

〔川しろじろとまじはりて〕

風桜

萎花

〔秘事念仏の大師匠〕〔一〕

麻打

驟雨

〔血のいろにゆがめる月は〕

車中〔一〕

村道

〔さき立つ名誉村長は〕

〔僧の妻面膨れたる〕

〔玉蜀黍を播きやめ環にならべ〕

〔うからもて台地の雪に〕

〔残丘（モナドノツク）の雪の上に〕

民間薬

〔吹雪かゞやくなかにして〕

〔いたつきてゆめみなやみし〕

いたつきてゆめみなやみし、　　　（冬なりき）誰とも
しらず、
そのかみの高麗の軍楽、　　　　うち鼓して過ぎれる
ありき。
その線の工事了りて、　　　　　あるものはみちにさ
らばひ、

あるものは火をはなつてふ、　かくてまた冬はきたりぬ。

〔水と濃きなだれの風や〕

水と濃きなだれの風や、　むら鳥のあやなすすだき、
アスティルべきらめく露と、　ひるがへる温石の門。

海浸す日より棲みゐて、　たゝかひにやぶれし
神の、
二かしら猛きすがたを、　青々と行衛しられず。

〔雪うづまきて日は温き〕

雪うづまきて日は温き、　萱のなかなる荼毘壇に、
県議院殿大居士の、　柩はしづとおろされぬ。

紫綾の大法衣、　逆光線に流れしめ、
六道いまは分るらん、　あるじの徳を讃へけり。

〔温く妊みて黒雲の〕

温く妊みて黒雲の、　野ばらの藪をわたる
あり、
あるいはさらにまじらひを、　求むと土を這へるあ
り。

からす麦かもわが播けば、　ひばりはそらにくるほしく、
ひかりのそこにもそもそと、　上着は肩をやぶるらし。

暁

さきは夜を截るほとゝぎす、　やがてはそらの菫い

ろ、
小鳥の群をさきだてて、
よもしぬ。
醒めたるまゝを封介の、
でて、
けじろき水のちりあくた、
りぬ。

くわくこう樹々をど
憤りほのかに立ちい
もだして馬の指竿と

上流

秋立つけふをくちなはの、　沼面はるかに泳ぎ居て、
水ぎぼうしはむらさきの、　花穂ひとしくつらねけり。
いくさの噂さしげければ、　蘆刈びともいまさらに、
暗き岩頸　風の雲、　天のけはひをうかゞひぬ。

〔打身の床をいできたり〕

打身の床をいできたり、
人なき店のひるすぎを、
粉のたばこをひねりつゝ、
ひ、
蠣売町のかなたにて、

箱の火鉢にうちゐれば、
雪げの川の音すなり。
見あぐるそらの雨もよ
人らほのかに祝ふらし。

〔氷雨虹すれば〕

氷雨虹すれば、　時計盤たゞに明るく、
病（いたつき）の今朝やまされる、　青き套門を入るなし。
二限わがなさん、　公（きみ）五時を補ひてんや、
火をあらぬひのきづくりは、　神祝（かむほぎ）にどよもすべけれ。

砲兵観測隊

（ばかばかしきよかの邑は、　　よべ屯せしクゾなる
を）
ましろき指はうちふるひ、　　銀のモナドはひしめ
きぬ。
（いな見よ東かれらこそ、　　古き火薬を燃し了へ
ぬ）
うかべる雲をあざけりて、　　ひとびと丘を奔せく

だりけり。

〔盆地に白く霧よどみ〕

盆地に白く霧よどみ、　めぐれる山のうら青を、
稲田の水は冽くして、　花はいまだにをさまらぬ。
窓五つなる学校（まなびや）に、　さびしく学童（こ）らをわがまて
ば、

藻を装へる馬ひきて、　　ひとびと木炭を積み出づる。

〔たそがれ思量惑くして〕

たそがれ思量惑くして、　　銀屏流沙とも見ゆるころ、
堂は別時の供養とて、　　盤鉦木鼓しめやかなり。

頬青き僧ら清らなるテノールなし、　　老いし請僧
時々に、

バスなすことはさながらに、　風葱嶺に鳴るがごと
し。

時しもあれや松の雪、　をちこちどどと落ちたれば、
室ぬちとみに明るくて、　品は四請を了へにけり。

悍馬〔一〕

毛布の赤に頭（づ）を縛び、　陀羅尼をまがふこと

ばもて、
罵りかはし牧人ら、
貴きアラヴの種馬の、
息あつくしていばゆるを、
まもりかこみてもろ
ともに、
雪の火山の裾野原、
赭き柏を過ぎくれば、
山はいくたび雲滃の、
藍のなめくぢ角のべ
て、
おとしけおとしいよいよに、
馬を血馬となしにけ
り。

〔そのときに酒代つくると〕

そのときに酒代つくると、　夫（つま）はまた裾野に出でし。
そのときに重瞳の妻（め）は、　はやくまた闇を奔りし。
柏原風とゞろきて、　さはしぎら遠くよばひ
き。
馬はみな泉を去りて、　山ちかくつどひてあり
き。

〔月の鉛の雲さびに〕

月の鉛の雲さびに、　みたりあやつり行き過ぎし、

魚や積みけんトラックを、　青かりしやとうたがへば、

松の梢のほのびかり、　霞にはかにそゝぎくる。

〔こらはみな手を引き交へて〕

こらはみな手を引き交へて、　巨けく蒼きみなかみ
の、
つつどり声をあめふらす、　水なしの谷に出で行
きぬ。

厩に遠く鐘鳴りて、　さびしく風のかげろ
へば、
小さきシャツはゆれつゝも、　こらのおらびはいま
だ来ず。

〔翔けりゆく冬のフエノール〕

翔けりゆく冬のフエノール、　ポプラとる黒雲の椀（わん）。
留学の序を憤り、　中庭にテニス拍つ人。

退職技手

こぞりてひとを貶（おと）しつゝ、　わかれうたげもすさまじき、
おのれこよひは暴（あ）れんぞと、　青き瓶袴も惜しげなく、
籾緑金に生えそめし、　代にひたりて田螺ひろへり。

〔月のほのほをかたむけて〕

月のほのほをかたむけて、　水杵はひとりありし
かど、
搗けるはまこと喰（は）みも得ぬ、　渋きこならの実なり
けり。

さらばとみちを横ぎりて、　束せし廐肥の幾十つ
ら、
祈るがごとき月しろに、　朽ちしとぼそをう
かゞひぬ。

まどろむ馬の胸にして、　おぼろに鈴は音をふるひ、
山の焼畑　石の畑、　人もはかなくうまいしき。

人なき山彙の二日路を、　夜さりはせ来し酉蔵は、
塩のうるひの茎嚙みて、　ふたゝび遠く遁れけり。

〔萌黄いろなるその頸を〕

萌黄いろなるその頸を、　直くのばして吊るされつ、
吹雪きたればさながらに、　家鴨は船のごとくなり。
絣合羽の巡礼に、　五厘報謝の夕まぐれ、
わかめと鱈に雪つみて、　鮫の黒身も凍りけり。

〔氷柱かゞやく窓のべに〕

氷柱かゞやく窓のべに、　「獺」とよばるゝ主幹ゐ
て、
横めきびしく扉（ドア）を見る。
赤き九谷に茶をのみて、　片頬ほゝゑむ獺主幹、
つらゝ雫をひらめかす。

来賓

狩衣黄なる別当は、　眉をけはしく茶を
のみつ。

袴羽織のお百姓、　ふたり斉しく茶を
のみつ。

窓をみつめて校長も、　たゞひたすらに茶

をのみつ。
しやうふを塗れるガラス戸を、　学童(こ)らこもごもに
のぞきたり。

五輪峠

五輪峠と名づけしは、　地輪水輪また火風、
(巌のむらと雪の松)　峠五つの故ならず。

ひかりうづまく黒の雲、　ほそぼそめぐる風のみち、
苔蒸す塔のかなたにて、　大野青々みぞれしぬ。

流氷（ザエ）

はんのきの高き梢（うれ）より、　きら〻かに氷華をお
とし、
汽車はいまや〻にたゆたひ、　北上のあしたをわた

る。
見はるかす段丘の雪、
りて、
天青石（アヅライト）まぎらふ水は、
り。

あゝきみがまなざしの涯、
もろともにあらんと云ひし、
遠き。

なめらかに川はうね
百千の流氷（ザエ）を載せた

うら青く天盤は澄み、
そのまちのけぶりは

南はも大野のはてに、　　ひとひらの吹雪わたりつ、
日は白くみなそこに燃え、　　うららかに氷はすべる。

〔夜をま青き藺むしろに〕

夜をま青き藺むしろに、　　ひとびとの影さゆらげば、

遠き山ばた谷のはた、　たばこのうねの想ひあり。

夏のうたげにはべる身の、　声をちゞれの髪をはぢ、

南かたぶく天の川、　ひとりたよりとすかし見る。

〔あかつき眠るみどりごを〕

あかつき眠るみどりごを、ひそかに去りて小店さき、
しとみ上ぐれば川音や、霧はさやかに流れたり。

よべの電燈（あかり）をそのまゝに、ひさげのこりし桃の頰（み）の、
アムスデンジュンいろ紅き、ほのかに映えて熟るるらし。

〔きみにならびて野にたてば〕

きみにならびて野にたてば、　風きららかに吹ききたり、
柏ばやしをとゞろかし、　枯葉を雪にまろばしぬ。

げにもひかりの群青や、　山のけむりのこなたにも、
鳥はその巣やつくろはん、　ちぎれの艸をついば

みぬ。

初七日

落雁と黒き反り橋、かの児こそ希ひしもの
を。
あゝくらき黄泉路(よみぢ)の巌に、その小き掌(て)もて得なん
や。

木綿(ゆふ)つけし白き骨箱、　哭き喚(よ)ぶもけはひあらじを。
日のひかり煙を青み、　秋風に児らは呼び交ふ。

〔林の中の柴小屋に〕

林の中の柴小屋に、　醸し成りたる濁り酒、　一筒汲

みて帰り来し、
むかし誉れの神童は、　面青膨れて眼ひかり、　秋は
かたむく山里を、
どてら着て立つ風の中。　西は縮れて雲傷み、　青き
大野のあちこちに、
雨かとそゝぐ日のしめり、　こなたは古りし苗代の、
刈敷朽ちぬと水黝き、
なべて丘にも林にも、　たゞ鳴る松の声なれば、　あ
はれさびしと我家の、
門立ち入りて白壁も、　落ちし土蔵の奥二階、　梨の
葉かざす窓べにて、

筒のなかばを傾けて、　その歯に風を吸ひつゝも、
しばしをしんとものおもひ、
夜に日をかけて工み来し、　いかさまさいをぞ手にとりにける。

〔水霜繁く霧たちて〕

水霜繁く霧たちて、　すすきは濡（そほ）ぢ幾そたび、
馬はこむらをふるはしぬ。

（荷縄を投げよはや荷縄）

雉子鳴くなりその雉子、　人なき家の暁を、
歩み漁りて叫ぶらし。

〔あな雪か　屠者のひとりは〕

「あな雪か。」屠者のひとりは、　みなかみの闇をす
かしぬ。
車押すみたりはうみて、　いらへなく橋板
ふみぬ。
「雉なりき青く流れし。」　声またもわぶる
がごとき。
落合に水の声して、　老いの屠者たゞ
舌打ちぬ。

著者

造園学のテキストに、
著者の原図と銘うちて、
と、
青き夕陽の寒天や、
革の手袋はづしつゝ、

おのれが像を百あまり、
かゝげしことも夢なれや
U字の梨のかなたより、
しづにおくびし歩みくる。

〔ほのあかり秋のあぎとは〕

ほのあかり秋のあぎとは、　ももどりのねぐらを
めぐり、
官（つかさ）の手からくのがれし、　社司の子のありか
を知らず。
社殿にはゆふべののりと、　ほのかなる泉の声や、
そのははことなきさまに、　しらたまのもちひを

なせる。

〔毘沙門の堂は古びて〕

毘沙門の堂は古びて、
胸疾みてつかさをやめし、
中ぞらにうかべる雲の、
川水はすべりてくらく、

梨白く花咲きちれば、
堂守の眼やさしき。
蓋やまた椀(まり)のさまなる、
草火のみほのに燃えた

れ。

雪の宿

ぬさをかざして山つ祇、　舞ふはぶらいの町の書
記、
うなじはかなく瓶(へい)とるは、　峡には一のうためなり。
をさけびたけり足ぶみて、　をどりめぐれるすがた

ゆゑ、
老いし博士（はくし）や郡長（こほりおさ）、　やゝ凄涼のおもひなり。
月や出でにし雪青み、　をちこち犬の吠ゆるこ
ろ、
舞ひを納めてひれふしつ、　罪乞ふさまにみじろが
ず。

あなや否とよ立てきみと、　博士が云へばたちまち
に、
けりはねあがり山つ祇、　をみなをとりて消えう

せぬ。

〔川しろじろとまじはりて〕

川しろじろとまじはりて、　うたかたしげきこの
ほとり、
病きつかれわが行けば、　そらのひかりぞ身を
責むる。

宿世のくるみはんの毬、
はかなきかなやわが影の、
り。

蒼茫として夏の風、
へし、

ちらばる蘆のひら吹きて、
なしぬ。

生きんに生きず死になんに、
影を、

干割れて青き泥岩に、
卑しき鬼をうつすな

草のみどりをひるが

あやしき文字を織り

得こそ死なれぬわが

うら濁る水はてしなく、　さゝやきしげく洗ふ
なり。

風桜

風にとぎるゝ雨脚や、　みだらにかける雲の
にぶ。

まくろき枝もうねりつゝ、　さくらの花のすさま

じき。

あたふた黄ばみ雨を縫ふ、　もずのかしらのまど

けきを。

いよよにどよみなみだちて、　ひかり青らむ花の梢（うれ）。

萎花

酒精のかをり硝銀の、　肌膚灼くにほひ
しかもあれ、
大展覧の花むらは、　夏夜あざらに息
づきぬ。

そは牛飼ひの商ひの、　はた鉄うてるも
ろ人の、
さこそつちかひはぐくみし、　四百の花のラム
プなり。

声さやかなるをとめらは、　おのおのよきに

票を投げ、
高木検事もホップ嚙む、　　にがきわらひを
頰になしき。

卓をめぐりて会長が、　　メダルを懸くる
午前二時、
カクタス、ショウをおしなべて、　　花はうつゝもあ
らざりき。

〔秘事念仏の大師匠〕〔二〕

秘事念仏の大師匠、　元真斎は妻子して、
北上岸にいそしみつ、　いまぞ昼餉をしたゝむる。

卓のさまして緑なる、　小松と紅き萱の芽と、
雪げの水にさかからひて、　まこと睡たき南かぜ。

むしろ帆張りて酒船の、　ふとあらはるゝまみまぢか、
をのこは三たり舷に、　こちを見おろし見すくむ

る。

元真斎はやるせなみ、　眼をそらす川のはて、
塩の高菜をひた嚙めば、　妻子もこれにならふなり。

麻打

楊葉の銀とみどりと、　はるけきは青らむけぶり。

よるべなき水素の川に、　ほとほとと麻苧うつ妻。

驟雨

驟雨そゝげば新墾（にひはり）の、　まづ立ちこむるつちけむり。
湯気のぬるきに人たちて、　故なく憤る身は暗し。

すでに野ばらの根を浄み、　蟻はその巣をめぐるころ。

杉には水の幡かゝり、　しぶきほのかに拡ごりぬ。

〔血のいろにゆがめる月は〕

血のいろにゆがめる月は、　今宵また桜をのぼり、

患者たち廊のはづれに、

木がくれのあやなき闇を、
熱植ゑし黒き綿羊、

月しろは鉛糖のごと、
コカインの白きかをりを、
あり。

しかもあれ春のをとめら、
みて、

凶事の兆を云へり。

声細くいゆきかへりて、
その姿いともあやしき。

柱列の廊をわたれば、
いそがしくよぎる医師

なべて且つ耐へほゝゑ

水銀の目盛を数へ、

車中〔一〕

夕陽の青き棒のなかにて、
葉巻のけむり蒼茫と、
開化郷士と見ゆるもの、
寒天光のうら青に、

玲瓏の氷を割きぬ。

開化郷士と見ゆるもの、
森槐南を論じたり。
いと清純とよみしける、
おもてをかくしひとは

ねむれり。

村道

朝日かゞやく水仙を、　になひてくるは詮之助、
あたまひかりて過ぎ行くは、　枝を杖つく村老ヤコブ。

影と並木のだんだらを、　犬レオナルド足織れ
ば、
売り酒のみて熊之進、　赤眼に店をばあくる
なり。

〔さき立つ名誉村長は〕

さき立つ名誉村長は、　寒煙毒をふくめるを、
豪気によりて受けつけず。

次なる沙弥は顱を円き、
猫毛の帽に護りつゝ、
その身は信にゆだねたり。

三なる技師は徳薄く、
すでに過冷のシロッコに、
なかば気管をやぶりたれ。

最後に女訓導は、
ショールを面に被ふれば、
アラーの守りあるごとし。

〔僧の妻面膨れたる〕

僧の妻面膨れたる、　飯盛りし仏器さゝげ
くる。
（雪やみて朝日は青く、　かうかうと僧は看
経。）
寄進札そゞろに誦みて、　僧の妻庫裡にしりぞ
く。

（いまはとて異の銅鼓うち、　　晨光はみどりとかは
る。）
〔玉蜀黍を播きやめ環にならべ〕
「玉蜀黍を播きやめ環にならべ、　　開所の祭近けれ
ば、
さんさ踊りをさらひせん。」　　技手農婦らに令

しけり。

野は野のかぎりめくるめく、
かにして、
まひるをひとらうちをどる、
ちをどる。

さあれひんがし一つらの、
せなにして、
所長中佐は胸たかく、
ぞみゐる。

青きかすみのな
袖をかざしてう
うこんざくらを
野面はるかにの

「いそぎひれふせ、ひざまづけ、　　みじろがざれ。」
と技手云へば、
種子やまくらんいこふらん、　　ひとらかすみに
うごくともなし。

〔うからもて台地の雪に〕

うからもて台地の雪に、　　部落（シュク）なせるその杜黝し。

曙人（とほつおや）、凴（の）りくる児らを、　　穹窿ぞ光りて覆ふ。

〔残丘（モナドノツク）の雪の上に〕

残丘（モナドノツク）の雪の上に、　　二すぢうかぶ雲
ありて、
誰かは知らねサラアなる、　　女（ひと）のおもひをうつ
したる。

信をだになほ装へる、　よりよき生へのこ
のねがひを、
なにとてきみはさとり得ぬと、　しばしうらみて消
えにけり。

民間薬

たけしき耕の具を帯びて、　羆熊の皮は着たれども、

夜に日をつげる一月の、　干泥のわざに身をわびて、
しばしましろの露置ける、　すぎなの畔にまどろめば、
はじめは額の雲ぬるみ、　鳴きかひめぐるむらひばり、
やがては古き巨人の、　石の匙もて出できたり、
ネプウメリてふ草の葉を、　薬に食めとをしへけり。

〔吹雪かゞやくなかにして〕

吹雪かゞやくなかにして、　まことに犬の吠え集りし。
燃ゆる吹雪のさなかとて、　妖（あや）しき※［＃「蚌」の「虫」に代えて「目」、54-3］をなせるものかな。

底本：「新修宮沢賢治全集第六巻」筑摩書房
　　１９８０（昭和55）年2月15日初版第1刷発行
※底本は、1作品が1ページにおさまるように行間を調整している。ただし、このファイルでは、作品の末尾にそのつど改ページの注記を書き込むことはせず、頁の変わり目ごとに3行をあけた。
※底本は、「作者専用の詩稿に書かれた詩篇を収録し」、多くの詩篇で、詩稿の形式に合わせて上下に二句を配置し、字間スペースなどを調整して下の句の頭が横にそろうように組んである。この形を取っている詩篇に関しては、本ファイルでも、句間を最低全角2字空け

とし、下の句の頭を横にそろえた。

入力：junk
校正：林　幸雄
２００２年5月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。